

## 文久期から慶応期における広沢真臣の政治動向と思想

下田 悠真

### 【目次】

はじめに	1～3頁
1、「攘夷」をめぐる	3～5頁
2、「面目」と「尊攘ノ大義」	5～8頁
3、長州復権問題をめぐって	8～13頁
4、新政体樹立を目指す	13～16頁
おわりに	16～18頁
①まとめ	
②今後の課題・展望	
註	18～24頁
付記	24頁

### はじめに

本稿は、幕末期（特に文久期～慶応期）における広沢真臣の政治動向と思想を追究し、幕末政治史における役割を考察するものである。

まずは、人物研究の意義について考えていることを説明する。幕末政治史の分野は、1980～90年代以降に実証的研究が盛んになり、政治過程などの重厚な成果が蓄積されていった<sup>1</sup>。近年では、これまで積み重ねられてきた精緻な実証的研究の成果を如何に総合的に把握し、全体像として提示していくかという課題が注目されつつある<sup>2</sup>。しかし、全体像を提示するには、「個」の研究をもっと正確に行なわなければならないと考える。

従来は、幕末政治史を論じるにあたって「～派」（例えば、尊王攘夷派・公武合体派・討幕派）と言った集団に依拠し過ぎていた嫌いがある。特定の思想を当てはめて一つの集団と見なし、人物たちをグループ分けすることで対立軸を単純明快に説明してきた。だが、歴史はそう単純ではない。こうした「～派」という思想集団としての捉え方は、それぞれの主張や葛藤を埋没させ、個性を封殺しているのである。また、こうした捉え方は、歴史を見るにあたって矛盾を起こ

す。果たして、脆弱な「個」への理解で全体像の提示が可能だろうか。幕末政治史は「個」の研究が盛んであり、魅力ある個性が歴史を動かしていったことは、これまでの豊富な人物評伝などを見ればよくわかる。だからこそ、より慎重に、より丁寧に史料に則して読み解いていく研究が求められていると言えよう。集団に依拠し過ぎず、まずは史料を通して一人の人間に向き合うということ、そのうえで歴史のなかで読み解いていこうとする姿勢が大事である。また、「個」により注目することは、特定の人物から時代の流れ・構造を見ていくことであり、様々な歴史像を見出せる可能性を持っている。「個」や時代背景などに対する納得できる理解が得られた先に、幕末政治史の全体像を提示できる機会は訪れるのではないかと考える。

本稿において幕末期における広沢真臣に注目する理由を説明する。幕末期長州藩における人物研究は、吉田松陰・木戸孝允・高杉晋作など比較的充実していると言える。そこで、これまで顧みられることのなかった人物に照射することで、さらなる幕末期長州藩の個性を探り、近世から近代への政治的過渡期である時代に重要な役割を担っていた人物の基礎的研究を行いたい。広沢真臣は、天保4年（1834）12月29日に長州藩大組士柏村安利の四男として萩で生まれた<sup>3</sup>。幕末期は長州藩士として藩政・国事活動に尽力し、明治期は新政府の要職を歴任したが、明治4年（1871）1月8日に東京の私邸にて何者かによって暗殺された。政治史において重要な存在であるにも拘わらず、広沢真臣の幕末政治史における役割を扱った専門研究は現在（2019年3月）のところ見受けられず、これまで学界で顧みられることもなかった。伝記としては、大正10年（1921）の村田峰次郎『参議廣澤真臣卿略傳』が唯一の広沢真臣伝記と言える<sup>4</sup>。本稿における最大の問題意識は、広沢真臣という人物が長州藩や明治政府で重きをなしていくことになるのは何故なのかということである。それ故に、幕末政治史における動向と思想を検討していくことは意義があるものと考えられる。「長州藩の実務担当者」から「政治家」へと変わっていく広沢を見ていくということである。本稿では幕末期における広沢真臣についての基礎的研究の役割を果たしていきたい。

今回の主な課題は次の3点である。

- （1）広沢真臣の「攘夷」に対する認識と動向
- （2）広沢真臣の長州復権問題に対する認識と動向
- （3）広沢真臣の薩長同盟・王政復古に対する認識と動向

課題設定について順に説明する。（1）は、広沢の「攘夷」思想とそれに関連した動向を読み解くことで、「攘夷」をめぐる政治史のなかに広沢を位置づけて

みたい。(2)は、長州藩の復権問題をめぐる政治史において広沢がどのような考え方で動いていったのかという点を明らかにしたい。(3)は、薩摩藩と長州藩が共同して新政体樹立に向けて行動を起こしたなかで、広沢の認識と動向を検討したい。特に慶応三年には広沢自身が中央政局において「討幕の密勅」等に関わり、重要な役割を果たしていく。幕末史の結果として「討幕」が果たされたとする説明がなされることがあるが、広沢や薩長両藩の人間が考えた変革の内容とは何であったのかということに留意しつつ、広沢について詳細な検討を加えてみたい。

## 1、「攘夷」をめぐって

広沢真臣(波多野金吾)が長州藩世子毛利元徳(定広・広封)に随従して京都に到着したのは、文久2年12月28日であった<sup>5</sup>。文久2年の長州藩は、長井雅楽が「航海遠略策」を引っ提げて公武周旋を行なうも罷免され、藩論が転換して「破約攘夷」の方針が立てられた。そんな中、広沢は世子毛利元徳の上京に際しての準備役を命じられ<sup>6</sup>、12月9日に世子元徳の上京に随従して江戸を出発した。京都に到着して、文久3年1月4日に京都詰めを命じられる<sup>7</sup>。ここから、広沢が藩政だけでなく、中央政治にも関わることになる契機が読み取れる。それまでの広沢は、江戸に滞在して台場警衛や御前警衛などを行い<sup>8</sup>、萩では藩政に従事する<sup>9</sup>立場にあった。それが世子元徳の側近くに仕えるようになり、さらに「攘夷」をめぐる政局で揺れ動いている京都に乗り込んだことによって、その渦中に身を置くことになった。あらゆる諸条件と環境が符合したことによって、後に長州藩や明治政府で重きをなすことになる広沢真臣が登場していく契機になったのである。

文久3年(1863)3月11日、加茂社行幸が行われ、世子毛利元徳も天皇に従った。世子に随従して広沢も行列に加わった<sup>10</sup>。4月11日には、石清水八幡宮への行幸が行われ、これにも広沢は随従している<sup>11</sup>。この後、21日に京都を出発し、山口に帰っていくことになるが、この途中の25日に桂小五郎(木戸孝允)と会談して攘夷期限が5月10日に決定したことを知らされる<sup>12</sup>。そして、5月13日に広沢のもとに長州藩が攘夷実行(外国船砲撃)を行なったという情報が伝わる。攘夷実行の報告を受けて、広沢は感想を日記に記している。広沢曰く、「庚申丸・癸亥丸貳艘方及打攘、盛挙、愉快々々」と<sup>13</sup>。さらに5月27日には、前日の下関におけるオランダ船砲撃の情報が伝わり、広沢は「掃攘此度に而

及三度之中に而は、随分大戦争、愉快々々」と感想を記した<sup>14</sup>。

6月2日、下関においてアメリカ艦が襲来してきたという情報に接した広沢は、「醜船不及沈没、切齒之至、実可悪、残念無量々々」と感想を日記に記した<sup>15</sup>。そして、藩から下関出張を命じられ<sup>16</sup>、来島又兵衛と交代するかたちで高杉晋作らと共に下関での軍務処理を担うことになる<sup>17</sup>。下関での軍務処理の責任者（「赤馬関総奉行」）は国司信濃であり、国司のもとで仕事に従事することになった<sup>18</sup>。15日に下関の白石正一郎方に到着し<sup>19</sup>、24日には国司信濃・高杉晋作らと共に前田台場を視察して、台場を守衛する者たちに酒を振舞い、焼亡した前田の百姓に米・銀を遣わしていることがわかる<sup>20</sup>。

7月17日、楫取素彦（小田村文助・素太郎）・高杉晋作らと相談して、長州藩の攘夷行動に協力しなかった小倉藩に対する弾劾書を認める。その内容は次の通りである<sup>21</sup>。

恐多も叡慮既に攘夷に被為決、長門下之関に於ては数度戦争に及びし処、小倉は咽喉緊要の地をトしながら未曾で一門の砲も不構、一介の兵をも不出、常に是を傍観するは武備不足乎、夷狄へ内通乎、罪一也、癸丑来十余年、内賊を眼前に見ながら不育人材、不繕武器、尸位不覚の罪二也、六月五日仏夷田ノ浦へ上陸せしに是を不撃而已ならず、剩彼が書状二通を受取候事、夷狄に狂れ御国辱を不弁、罪三也、嚮に長州より毎度使者を以て叡慮の所被為向、夷狄速に不攘はあるべからざる、趣意懇切に申諭せしかども、幕府の譜代と云を以て更に不応、遂に長州より砲台場所推借せらるゝに至る、是全く義理に暗く隣国の礼を失する処置、罪四也、幕府奸猾の所為、違勅の振舞と知りながら一言其不正を不糾は譜代の責を不尽、国家の大変を不憂して因循姑息に安んず、罪五也、右五罪は皇天の所照鑑、決して不可免逆賊也、仮令神勅の威厳に因り一旦陽従仕候とも、素より其君昏愚にして其臣懦弱忽夷狄の有と為る時は皇国の御一大事と奉存候、伏願は其君臣を貶遂し、忠義義烈必死の士近辺に不乏候間、一先是を以て此場を守らせ、長州と相応援仕候時は賊艦幾千万襲来候共決して内海へ闖入致させ間敷奉存候、左候て佐賀の関鳴戸の両港口、屹と防禁被仰付候はゞ中西国は平穩勿論の儀奉存候、乍恐御明察被為遊、速に御英断被為在度、不顧微賤奉申上候、恐懼死罪

この「小倉藩弾劾書」について分析を行なってみたい。1つ目としては、下関で長州藩が外国と戦争を行なっていたにも拘わらず小倉藩が傍観したことを責め立てる。2つ目は、ペリー来航以来（「癸丑来十余年」）、小倉藩内部の賊臣を

目の前にしながら人材を育てず、武器も繕わないので、これは「尸位不覚」（地位にありながら何もしないこと）であると小倉藩主に向けた弾劾内容のようである。3つ目は、フランス人が上陸した際に小倉藩はフランスからの書状を受け取り、外国人に親しみ国辱を弁えていないとする。4つ目は、長州藩の方から小倉藩に対して、叡慮に向き合い、外国人を打ち払わないことがあってはならないと懇切に申したけれど、小倉藩は幕府の譜代であると言ってこれに応じず、とうとう長州藩で砲台場所を間に合わせた。小倉藩は義理に暗く、隣国の礼を失しているとする。5つ目は、幕府が「奸猾の所為、違勅の振舞」であるとしながら、小倉藩は少しも不正を糺さず、幕府譜代の責を果たさず、「国家の大変」を憂慮することなく「因循姑息」に安んじているとする。以上のように、攘夷実行に協力しなかった小倉藩を弾劾することが主な内容であるが、背景には幕府への批判と諸外国に対する脅威感がある。

## 2、「面目」と「尊攘ノ大義」

文久3年（1863）8月18日、京都にて政変が起こり、長州藩は三条実美ら七卿を伴って中央政治から退いた（八月十八日政変）。この時期の広沢は引き続き下関で仕事をしていた。8月13日に世子毛利元徳の下関来訪に御供し、前田砲台を巡視している<sup>22</sup>。さらに、その3日後には「教法寺事件」に直面する<sup>23</sup>。9月23日には、蔵元役に就任している<sup>24</sup>。八月十八日の政変直後における広沢の考えなどが伝わる史料は残念ながら発見できなかった。

元治元年（1864）3月14日、三条実美らの下関来訪に随行するようにとの命令が下り<sup>25</sup>、26日から28日にかけて下関の砲台巡視や亀山八幡宮参拝に随行している<sup>26</sup>。「攘夷」という大義名分を踏まえた一連の行事である。また、「攘夷」という大義名分を引っ提げて活動していた長州藩が中央政治から除かれている状態を京都へ進発することで打開しようという動きも当然あった。そのことが臨場感を持って伝わってくる回顧談がある。「吉富簡一談話速記」は、元治元年5月の広沢と来島又兵衛の騒動を伝える。その内容を簡単に紹介する。来島が周布政之助へ速やかに京都進発を行なうべしと主張するために、規則を無視して山口政事堂に押し入った。これに怒ったのが、ちょうど政事堂で政務を行っていた広沢であり、来島が上がってくる段梯子の上で待ち構え、蹴落とそうとして揉み合いになった。この喧嘩は、周布が来島に面会を許したことで落ち着いた。この後、来島は勢い余って涙を流しながら進発論を主張したが、周布は同意しなかつ

たという<sup>27</sup>。当時の広沢が進発論にどのような考えを持っていたのかはわからない。この回顧談からは、来島の規則無視に怒りを表しているように見える。仮に広沢が進発論に傾いていたとしたら、来島が周布に進発論を主張して説き伏せようとする行為を歓迎するのではないだろうか。いずれにしろ、回顧談という史料の性格上、断定は避けたい。

5月11日、世子毛利元徳の京都進発のため、広沢は操練御用掛に任命された<sup>28</sup>。7月4日、毛利元徳の京都進発に随行を命じられる<sup>29</sup>。そして、13日に前田孫右衛門らと共に世子元徳の進発に従って出発し、京都を目指すことになった<sup>30</sup>。しかし、広沢らが進行中の19日に「禁門の変」が勃発し、長州藩は敗北・撤退を余儀なくされた。この情報は広沢らにも届き、世子元徳の進発は中止され、急遽引き返すことになった。

7月27日、広沢は松島剛蔵・檜崎弥八郎と共に水野丹後・土方久元と会談する。この際の広沢・松島・檜崎側の発言が『回天実記』に記録されているので見てみよう<sup>31</sup>。

公卿様方御進退之儀ハ、実以重大之御義ニ付、主人大膳大夫（毛利敬親※筆者註）ニモ甚心痛ニテ、当処迄罷越、父子連席彼是御評議可仕旨、今朝急飛ヲ以申越候処、長門守（毛利元徳※筆者註）ニ於テハ、遠路之処、是迄老体之身（毛利敬親のこと※筆者註）ヲ引受候儀ハ、父子之情難忍筋モ有之候ニ付、自分（土方※筆者註）三田尻迄罷帰大膳大夫彼地ニ待合セ候様、既ニ使者ヲ以申遣候間、何卒公卿様ニモ三田尻迄御出被遊、同所ニ於テ御進発御趣意之貫通致候様、御評決被遊度偏ニ懇願仕候、猶御兩人（水野・土方※筆者註）御見込之所、如何ニ候哉相伺度旨、申出候ニ付、前夜ヨリ今晝迄御評議御決諭ノ所ヲ申聞候処、左様ニテハ甚奉恐入候間、何卒一先ツ三田尻迄御引返被成下、両主人共々篤ト御軍議被成下候様、何分ニモ奉願候間、此議偏ヘニ御尽力被下、不悪御取成之程希望仕候

三田尻で長州藩主父子・五卿・長州藩重役による今後の方針についての会議を開こうと調整を図る広沢らの様子が伝わってくる。その会議の趣旨としては、傍線部にあるように、進発の趣意（八月十八日政変の不当性を訴えること）を貫き続けていくことを確認しようとするものである。そして、その2日後の29日に三田尻で大会議が開かれたが、広沢らの思う通りにはいかなかった<sup>32</sup>。さらに、この時期には五卿の備前移転説が持ち上がり、広沢らは危機感を募らせていた。五卿の進退についても、「公卿様方御進退之儀ハ、実以重大之御義ニ付<sup>33</sup>」とある

ように、大会議では話し合われたようであるが、何も決まらなかった<sup>34</sup>。広沢らの目論見としては、この大会議で進発の趣意貫徹を再確認し、同時に五卿の移転を阻止する決定を得ようとしたものだと考えられる。

大会議の翌日の30日に、広沢は村田次郎三郎・檜崎弥八郎・天野謙吉と共に招賢閣で土方久元と会談した。五卿の備前移転説に対して、広沢らは、「備前御越之儀、懇々御留申候、弊藩ニモ今日之行懸リ一時ハ相屈不申テハ不相叶仕合ニ候ヘトモ、兎角ハ尊攘ノ大義相貫可申見込ニ付、何分ニモ是迄通御滞在被成下度、且ハ今更他国へ御立退相成候テハ御頼甲斐無之様御見捐相成候姿ニ相見へ、隣邦へ対シ候テ弊藩面目モ如何ニ候」と言ったが、土方から「五卿方ニハ只此儘滞在致候ハ、遂ニ赤心貫徹之期至ラス、若中途ニテ命数相果候様ノ事有之テハ、末代不義之面目ヲ負ヒ、何時冤罪相雪可申哉、是天朝ニ対シ奉リテハ不忠、又祖先ニ対シテハ不孝、臣子之道両ナカラ失フノ筋ニ候ヘハ、是非共一先罷越候テ相試可申」と言われて、その日は仕方なく引き取っている<sup>35</sup>。広沢らは、「尊攘ノ大義」を貫きたい意志を述べ、五卿が他国へ移ったとなると、長州藩の「面目」はどうかと危機感を抱いている。つまり、長州藩にとって三条実美ら五卿は、「尊攘ノ大義」を貫くための象徴的な存在であり、五卿を保護することで長州藩の活動や主張が正当づけられると、少なくとも広沢らの認識はそうであったと考えられる。また、五卿が他国へ移転したとなると、長州藩は五卿から見捨てられたと他者から捉えられることを危惧している。

8月1日、前田孫右衛門・毛利登人・高杉晋作・赤祢武人らと会談し、「禁門の変」についての事後対応策として、和議を行なって朝廷・幕府からの沙汰を待つかどうかを話し合っているが、今更和議を行なっても長州藩の人心が平穏にならないとする反対意見が出るなどして結局は何も決まらなかった<sup>36</sup>。

五卿の備前移転説について動きがあったのが8月3日のことである。広沢は、野村靖・村田次郎三郎・檜崎弥八郎・天野謙吉らと共に招賢閣へ赴いた。外国船二十四艘が下関に襲来するという風説があり、五卿が他国へ移ったとなるとこの国難を見捨てたということになり、長州藩は「攘夷御先鋒之御含ニモ有之」ので、五卿の備前行きは「御止相成」明日には山口へ行くことに「御評議一変」したことが伝えられたのである<sup>37</sup>。五卿の備前移転中止に安堵した広沢は、翌4日に山県弥八郎・前田孫右衛門と共に下関へ出張する<sup>38</sup>。外国船襲来の風説があったためである。その風説は現実のものとなった。5日、連合艦隊によって下関が砲撃される。

8月10日、下関を砲撃した連合艦隊との講和談判に際して、長州藩主毛利敬親の直書<sup>39</sup>を渡す一団に広沢も加わっている。「攘夷先鋒」としての長州藩の体面

を守ろうとし続けた広沢が、結局は攘夷実行の後始末を行なうことになったのである。13日に宍戸備前・高杉晋作・山田宇右衛門らと共に外国人応接が命じられ<sup>40</sup>、翌日には連合艦隊との和議が成立する<sup>41</sup>。

8月29日、広沢は政務役・蔵元役に就任する。欧米列強との講和談判という重大な任務を務めたことなどが加味されての昇進だと考えられる。しかし、9月14日に前田孫右衛門らと共に病と称して辞職を願い出ている。その約1か月後の10月24日に辞職願が受理される。長州藩の内訌が激しくなり、危機的な状況を察知した広沢は山口から諸隊に向けて書簡を發し、これを受けて赤祢武人や山県狂介（有朋）は山口を脱出した<sup>42</sup>。そして、12月19日、遂に広沢は村田次郎三郎・小田村文助（楫取素彦）らと共に野山獄に投ぜられる<sup>43</sup>。広沢投獄の3日前に長府・功山寺で高杉晋作がクーデターの狼煙を挙げていたが、場合によっては広沢自身が反対勢力に処刑される可能性もあり、命の危機に直面していた。広沢が投獄された日は実際に前田孫右衛門・毛利登人・山田亦介・松島剛蔵・大和国之助・檜崎弥八郎・渡辺内蔵太が処刑されている。最大の危機に直面していた広沢であったが、運よく処刑されずに経過し、高杉らのクーデターの成功によって政権転覆が果たされた。広沢や小田村がその後の長州藩で活躍したことを考えると、この時点で命が助かったことは重要な意味をもつ。

窮地を脱した広沢は、元治2年（慶応元年・1865）2月15日に牢獄を出て、やがて謹慎を解かれる<sup>44</sup>。3月に入ると、手当方用掛<sup>45</sup>や政務役<sup>46</sup>・御用所右筆<sup>47</sup>に任じられ、前原一誠と共に山口にて機務を処理することになる。潜伏生活を余儀なくされていた木戸孝允が帰還するまでの間、広沢は前原と共に長州藩の柱となって内政の整備に努めたと言える。

長州藩は内政を充実させ、中央政局における復権に向けて本格的に活動を展開していくことになる。広沢自身は、長州藩の立て直しを担うリーダーの一人として幕府や諸藩との重要な交渉を行なう立場となっていく。

### 3、長州復権問題をめぐって

まず、慶応期の政治史における長州藩の立場を前提として押さえておく。第1点としては、「朝敵」のため中央政治に加わることができないということである。第2点としては、中央政治における長州復権問題や政治変革構想は主に薩摩藩や芸州藩などの周旋に依拠していくことになるということである。慶応期の長州藩

は、混乱していた藩内をまとめ上げ、中央政治における立場を復活させることが大目標である。禁門の変で負うことになった「朝敵」の立場については、既に指導者であった3家老の首を差し出したことで謝罪を果たしたとして、特に朝廷・幕府を後ろ盾とする一橋（徳川）慶喜・会津藩・桑名藩などの強硬な長州処分・再征論に対峙する構えであった。長州藩としては、いずれ不条理な名分で幕府の大軍が防長2ヶ国に攻めてくることを見越して、武備の充実と藩内の統一によって「待敵」体制を構築しようと図った。また、長州藩を理解してくれる同志的な藩を求め、筑前藩士や土佐浪士などの仲立ちを得て薩摩藩との信頼関係の構築を模索した。では、長州復権問題をめぐる広沢真臣の動向・思想は如何なるものであったのか見ていきたい。

慶応元年5月28日、広沢は下関滞在中の木戸孝允に対して次の書簡を發した<sup>48</sup>。

薩州小松帯刀西郷吉兵衛等御当家之儀に付周旋尽力仕候様子に御座候処、是迄岩公（吉川経幹※筆者註）より御内々御頼に相成り御手を被就置候得共、此御方（吉川経幹※筆者註）情実委細通じ兼居候様に相見へ申候付、両君公（毛利敬親・元徳※筆者註）御内慮之処、岩公より小松西郷等へ改て被仰入被下候様被成御頼、尚又小松西郷も万一内輪において嫌疑共有之候ては難堪次第に付、御彼方君公（島津久光・茂久※筆者註）迄徹上仕置候得ば、小松西郷等も内輪掛念無之、公然尽力可相成歟との書面、侍御史より政府へ持出、其節十分に老兄にも御同意之様相咄、節角如何之事に候哉被相考候得共、先達条公（三条実美※筆者註）へ御呈の趣も承知仕居、多分意味不通にて可有之、兎に角薩へ両君公より改て御頼被申筋は不可然、当今彼藩（薩摩藩※筆者註）種々之取沙汰も有之候得共、実否不分明にて手を下し還て情実齟齬仕又候、如何体之御国害出来も難計、何分にも御差止可然と断然相決置候、薩迎も実に神州之御為尽力仕候得ば、我藩においても私怨を以十口申筋無之段は勿論之事と相考候得共、即今之艱難を相凌んため手を下候様には決して相成申間敷、矢張是迄之御親因之処を以御附合相成り可然事と奉存候、尤弥皇国之御為周旋仕事に候はゞ其節に至り御取計振も可有之、其内之処は行形之通、岩公より之御頼之筋にて可然奉存候

薩摩藩との付き合い方について木戸に意見する書簡である。広沢は、現時点での長州藩主父子（両君公）が絡んだ薩長交渉の弊害を心配する。薩摩藩が長州藩のために尽力している様子だが、長州藩側からしてみれば「実否不分明」（薩摩藩が長州藩のために本当に尽力しているのかわからない）であるから、この時点で藩主を交えた交渉を展開することは、またしても「情実齟齬」してしまう可能性もあり、どのような「御国害」が生じるかわからないという。つまり、それまで岩国吉川家が窓口になって間接的に薩長交渉がなされていたものの、長州藩には薩摩藩の尽力が事実か否かを見極める確かな情報が不足していたと言える。薩摩藩の尽力を確認できないうちは、長州藩としても藩主を関わらせることは出来なかった。

閏5月9日、木戸に対して山田宇右衛門・前原彦太郎（一誠）・兼重讓蔵との連名で次の書簡を發した<sup>49</sup>。その内容は、西郷吉之助（隆盛）との会談が下関で予定されている木戸に対して、「太宰府御越之儀は一先御見合相成り御相對之上、彼藩可疑事体、御督責相成り候上、弥可信趣に候はゞ、追々被着御手度御存慮御同意奉存候」と、太宰府行きは一旦見送り、西郷と会談して、信じるに足るのであれば話を進めていきたいという木戸の考えに同意している。そして、「大島（西郷※筆者註）え御相對相成候得は、薩筑国論は不及申、上国向其外総而之形勢も分明相成候半、相濟次第疾御帰山偏に奉待候」と、西郷と会談すれば薩摩・筑前藩のみならず京坂方面の全ての形勢もわかるだろうから、会談が済んだら速やかに山口に帰ってきてほしい旨を伝えている。薩摩藩の重役との直接交渉により様々な情報を得ることができそうな機会であったが、結局は下関での木戸・西郷会談は実現せず、一旦は流れた。それでも、今度は長州藩による武器購入を薩摩藩が支援することで薩長関係の構築が図られていくことになる。

8月15日、広沢は山田宇右衛門に宛てた書簡で、「薩一件何も都合能様相見へ、為國家大幸不過之、一段之事奉存候」と、武器購入をもとに薩長関係が構築されていくことは国家のために大変喜ばしいことであると伝えている<sup>50</sup>。また、28日には木戸に宛てて書簡を發し、武器購入が順調に進んだことに安堵していることを伝えると共に、「薩之遠大之見込杯可恐事、御当家においても屹度将来之策略相立不申ては多年之御正氣も相貫き不申次第、確乎御不動無之ては元より御維持無覺束事と奉存候得共、御存之通僕輩力之及所に無御座、誠以奉恐入、併居官中は此内御決議通りは屹度貫徹仕候様御手伝仕度奉存候間、老兄御奉之御用筋は、無御辞退御尽力偏に奉願候」と、薩摩藩が遠い将来のことまで考えることに驚いており、長州藩も確固とした方針を立てていかなければならないと言う。そのために、広沢自身の力だけでは及ばないだろうが、政権のなか（「官中」）

にいるうちは貫徹できるようにお手伝いしたいとして、木戸（「老兄」）も職責を辞退することなく尽力してほしいことを伝える<sup>51</sup>。このように、薩長交渉が進展していくなかで、広沢は薩摩藩の「遠大」に触発され、復権問題の解決と「待敵」体制の構築が急がれている長州藩の将来的な方針について検討していくべきことを気づかされたと言える。そのために、広沢だけでなく、木戸などの力も必要であり、広沢は木戸を助けていくことを改めて伝えたのである。

9月8日、長州藩主父子から薩摩藩主父子へ書簡が送られる。これによって、薩摩藩と長州藩の和解が正式に成立したと言える<sup>52</sup>。そして、薩長関係は次なる段階へと進んでいく。

広沢は坂本龍馬と山口にて会談を行なう。坂本は上方における長州再征に関する朝議と薩摩藩周旋の状況を述べ、東上する薩摩藩兵のための糧米買入を依頼する。また、「一会桑」によって強引に長州再征の勅命が作られ、薩摩藩はそれに断固反対姿勢をとっているということを広沢に伝えている<sup>53</sup>。この坂本との会談によって、薩摩藩の決意の程をさらに深く知った広沢は、2通の書簡を10月4日に木戸孝允に向けて出している。1通目は、山田宇右衛門・国貞直人・中村誠一と共に出した書簡である<sup>54</sup>。その内容は、「薩藩西郷等大に尽力致候得共、其詮無之、右に付早蒸気にて早急帰国、率兵而登坂、兵力を以再度押止め度との策之由」と、あくまでも伝聞情報としてだが、西郷吉之助が兵力を使ってでも長州再征を阻止しようとしているらしいことを木戸に伝える<sup>55</sup>。そして、「孰れ四境へ押寄可申、御手当向全備と申すは間に合申間布哉に候得共、決戦は素より覚悟之前、狼狽は不致候間、其段は御放念可被下候」と、いずれ征長軍が押し寄せたら、全ての準備が整っていなくても決戦する覚悟であることを伝える。もう1通は、広沢が単独で木戸へ宛てた書簡である<sup>56</sup>。「此度坂本龍馬事上国近情報知実には不耐驚愕次第、幕如何程暴断に出候共、兼て覚悟之前、是迄御決議通り必戦勿論之事、孰れ戦争勝利之上ならでは、多年之御正義貫徹不仕事に付、過日御手当向献言之廉々追々御手を被下、何時敵兵襲来いたし候共、屹度御実備相立、聊御手後れ無之様、早々相調かすと申合、精々尽力仕候」とある。坂本龍馬との会談で知った情報は驚くべきものであったという。そして、再度「必戦」の覚悟を伝え、幕府との戦争に勝利しなければ正義は貫けないとし、手遅れのないように備えていきたいという。このように、広沢と坂本龍馬との会談は長州再征阻止をめぐる政治史において意義のあるものであった。

10月6日、山口に來訪した植田乙次郎・永田権介と会談し<sup>57</sup>、ここから芸州藩を介した幕府との駆け引きが始まる<sup>58</sup>。

慶応2年（1866）1月、「第一次薩長同盟」が形成される<sup>59</sup>。

この「第一次薩長同盟」は、朝廷・幕府による長州再征を推進する一会桑を打倒対象とした軍事同盟である。これを背景に長州藩は幕長戦争を戦い抜いていくことになる。

3月22日、広島にいる小田村・赤川又太郎に宛てて広沢は書簡を出す<sup>60</sup>。その内容は、「武備御更張士民一統同心一致之处は、日増堅固、只々御手切手初のみ相待居、尤軽拳は決して不仕、御安心云々」とある。長州藩の軍備拡張と「第一次薩長同盟」を後ろ盾として、圧倒的な兵力差の官軍（幕府軍・征長軍）との手切れを待ち、決戦に自信を持っている様子が伝わってくる。4月3日には、広沢自身が薩摩藩側へ書簡を出している<sup>61</sup>。「今日之勢不日決戦ニ立至候ハ、現然ニ御座候、今更毛頭可驚事ハ無之、飽マテ乱ヨリハ条理ヲ相立テ、天下ヘモ得と是非正邪ハ相示シ、遺憾無之様致シ」と、決戦に際して長州藩の方が正義であることを示そうとする。

つまり、広沢は、長州藩の「正義」や「大義名分」にこだわり、それを戦争に活かそうとした。一会桑や幕府ではなく、長州藩が「正義」であることを天下に示し、官軍が防長2ヶ国に侵攻してくる構図を創出させたかったのである。

しかし、南奇兵隊脱走事件<sup>62</sup>でその構想は危機を迎える。4月7日の小田村・赤川宛て広沢書簡では、構想が潰えるかもしれない危機感を広沢が吐露している<sup>63</sup>。その書簡に曰く、「弥増幕府困究、終には渠より兵端相開候程に致度、左候得ば堂々大義名分凜然相立、々派之戦争とのみ存詰候処、今日に到り自然右隊中之者（南奇兵隊※筆者註）、芸地へ向ケ暴動いたし候ては、兎角此迄之苦心も水之泡と相成可申、悲歎此時に御座候」とあり、南奇兵隊脱走事件により長州藩側の大義名分が立たないことを心配する。また、広沢が望む筋書きが、幕府から戦争を始めさせ、長州藩にとっては大義名分が立ち、「立派之戦争」として戦い抜いていくというものであったことが明らかである。6月7日、幕長戦争が開戦し、戦局は長州藩優位で休戦交渉に入ることになる。

9月2日、広沢は井上聞多らと共に勝海舟を相手に幕長戦争の休戦交渉を厳島にて行なう。ここで広沢らは、勝海舟から重要な言質を得ることになる。勝は、「橋侯御内意は何分かゝる形勢に相成候ては実に不相済に付此余は関西諸侯大坂に招き衆議決定之上公平至当に御処置可被為在との思召に付此段篤と申入候様とのことに御座候」と広沢らに語り、徳川慶喜の意思は諸侯を大坂に集めて衆議により、「公平至当に御処置」を行ないたいというものであるという<sup>64</sup>。「公平至当の御処置」の具体的な内容は明らかではないが、長州藩側にとっては「朝敵」の汚名を雪ぐこと、つまりは復権が果たされることを意味していた。10日、広沢は木戸・高杉・前原・藤井宛ての書簡で、「一橋公御見込通ニモ被相行候得ハ、

随分面白形勢ニモ大一変ノ期可有之様被相察」と、徳川慶喜に期待をかけている<sup>65</sup>。

広沢真臣は、来るべき幕長戦争に備えて、薩摩藩と慎重に交渉を行なう立場を取りつつ、長州藩の大義名分が立つように徹底的に配慮した。そして、軍備拡張と「第一次薩長同盟」を背景に幕長戦争を戦い抜き、休戦交渉では勝海舟から長州復権についての言質を得ることに成功した。これら一連の長州復権問題の解決に向けた動向のなかで広沢の役割はととても重責を伴ったものであることがわかるであろう。

#### 4、新政体樹立を目指す

幕長戦争休戦交渉の際に広沢が勝海舟から得た言質は、徳川慶喜が中心となって公議により「至当の処置」（長州復権）を行ないたいというものだった。長州藩としては、薩摩藩や芸州藩の引き続きの尽力を頼みとしつつ、休戦交渉における勝の言葉を信じて復権が果たされることを願うしかなかった。

しかし、慶応3年（1867）5月、将軍徳川慶喜が長州復権問題を棚上げ状態にしたことで、再び先行きがわからなくなった。将軍慶喜に裏切られたかたちになった薩長両藩は徳川政権に代わる新しい政治体制を希求する。

慶応3年6月から12月までの政治史は、薩長両藩が「討幕」に向けた軍事行動を起こしていく過程として描かれてきた<sup>66</sup>。そして、未だに西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允・広沢真臣などが「討幕派」の人物として考えられている状況だと言える<sup>67</sup>。広沢真臣の動向・思想を中心に新政体樹立（王政復古）を目指していく過程を論じ、合わせて広沢らが「討幕<sup>68</sup>」という手段を志向していたと考えてよいのか検討してみたい。

8月14日、京都・小松帯刀邸（近衛家別邸・御花畑屋敷）にて薩長会談が開かれた。長州藩側は柏村数馬・御堀耕助、薩摩藩側は小松帯刀・西郷吉之助・大久保一蔵である。この会談で、薩摩藩側から長州藩側へ新政体樹立に向けた具体的な方針が伝えられた<sup>69</sup>。その内容は、「三都一時ニ事を挙候積ニ御座候」と、江戸・京都・大坂を中心として挙兵を行なうというものである。また、薩摩藩側は「於弊藩討幕ハ不仕」とし、挙兵したあとに「討将軍之倫（綸）旨」を発出させる計画であることも告げた<sup>70</sup>。9月18日には、山口にて薩長会談が行われ、広沢は木戸らと共に薩摩藩の大久保・大山格之助と京都・大坂方面への薩長出兵を約束した<sup>71</sup>。これを「第二次薩長同盟」と定義する<sup>72</sup>。このように、慶応3年8月

から9月にかけて薩長両藩の出兵・挙兵方針が形成された。

9月23日、広沢は広島へ向かい<sup>73</sup>、芸州藩と交渉を行なうことで、薩長両藩のみならず芸州藩を軍事同盟に引き入れようと図る。10月3日に広島から書簡を出す<sup>74</sup>。その内容は、「何分失時機候而は、実に不相濟事、痛憤悲歎此事に奉存候、弟上坂、薩芸へ得斗談合、急速御報知可申上候」「切迫中彼是行違ひ出来、不堪痛歎何と歎一致、義挙迅速是祈而已」と、挙兵の機会を失ってはいけないとし、これから大坂（本当は京都へ。長州藩は未だに「朝敵」のままであり、京都に入ることが本来は叶わないため、書簡でも京都入りを記すことを憚ったのかも）へ行き、薩摩藩・芸州藩の者たちとよく話し合ってくるという。そして、何とか一致して「義挙」が迅速に行えることを祈るのみだという。広沢は6日に京都へ入った<sup>75</sup>。

10月8日、広沢は薩摩藩・芸州藩の面々と会談し、大久保・植田乙次郎と共に3藩の決議を中御門経之・中山忠能へ伝えた<sup>76</sup>。挙兵後に同志の公家の尽力で「討將軍綸旨」の発給などを考えており、3藩で同志の公家に覚悟を伝えたことで京都における挙兵準備は整ったと言える。広沢は、3藩で確定したことを報告するためにその日のうちに京都を出発する<sup>77</sup>。しかし、大坂に到着した後に福田狭平から薩摩藩兵と軍艦の到着遅延による薩長芸出兵の「失機改図」（延期・見直し）が伝えられる。そのため、広沢は10日に再び上京し、薩摩藩と再度の話し合いを行なうことになったのである<sup>78</sup>。広沢は大久保から、小松・西郷・大久保が一旦帰国し、形勢を報告して出兵・藩主出馬を要請することで大挙を図るといふ薩摩藩の計画が伝えられる<sup>79</sup>。薩摩藩側としては、自らの遅延が原因で「失機改図」になった状況を挽回していく必要があった。この頃、広沢は長州藩に向けて書簡を発している<sup>80</sup>。そこには、「幕情当今尤困迫の事件不少、併兵備は日に増厳密にいたし、孰れの道当月中には屹度三藩手筈を合し断策無之ては、決て王政御復古の御実行は相挙り申間敷奉存候、尤当度延期は還て大幸、是にて後謀も別て相締り可申奉存候」と記されている。「失機改図」となったが、10月中には薩長芸の出兵を実現させなくては「王政御復古」はできないという。しかし、今回の延期はかえって今後の作戦を立てるうえでは良かったとも言っている。

10月13日から14日にかけて、広沢・大久保は正親町三条実愛・岩倉具視から「徳川慶喜誅伐の御沙汰書」「松平容保・松平定敬誅伐の御沙汰書」が渡される<sup>81</sup>。8月14日の薩長会談の際に「討將軍之綸旨」として話題に挙がったのが、この「徳川慶喜誅伐の御沙汰書」である。薩摩藩側の当初の計画では、挙兵のあとに発給されるように同志の公家たちに取り計らってもらうものとしていたが、薩摩藩の出兵を何が何でも実現させるために前倒しして用意されたのであ

る。「徳川慶喜誅伐の御沙汰書」というのは、従来は「討幕の密勅」と呼ばれていた。しかし、内容は「殄戮賊臣慶喜」と記されており、松平容保・松平定敬の誅戮と共に考えると、「一会桑」の打倒を指令していることに他ならない<sup>82</sup>。本稿では、「討幕の密勅」ではなく、「徳川慶喜誅伐の御沙汰書」と呼称することを推奨したい<sup>83</sup>。

10月17日、広沢・福田狭平・品川弥二郎は小松・西郷・大久保と共に京都を出発し<sup>84</sup>、23日に山口に到着した<sup>85</sup>。そして、11月は長州藩の出兵に向けて再準備を行なうことになる。11月19日、広沢は木戸と共に土方久元と会談した際に、「両藩共此上ハ議論位ニテハ中々相運申間敷見込ニテ、上京ノ上ハ臨機応変之処置ニ及候」と語っている<sup>86</sup>。薩長両藩は議論では事態が解決しないという見立てを持ち、上京して臨機応変の処置を行なう方針であることを五卿の従者である土方に伝えたのである。木戸・広沢は、京都・大坂にて武力衝突が起こることを覚悟していたが、必ずしも長期間の戦争を望んでいたわけではない。11月22日付の品川弥二郎宛て木戸孝允書簡にそのことが示されているので見てみたい<sup>87</sup>。

至其期其期に先じ而甘く玉を我方へ奉抱候御儀、千載之一大事に而、自然万々一も彼手に被奪候而は、たとへいか様之覚悟仕候とも現場之処四方志士壮士之心も乱れ、芝居大崩れと相成、三藩之亡滅は不及申、終に皇国は徳賊之有と相成、再不可復之形勢に立至り候儀は鏡に照すよりも明了に御座候間、此処は詰度乍此上岩西大先生達ちへも御論し、一步一厘御抜き無之様御尽誠尤肝要第一之御事の御座候、(中略)一応勝を占め候とも、余り長引、終に世間大に疑惑を生し、紛乱を醸し候而は、其決局必然外夷之術中に陥り候儀は眼前之事に御座候間、迅速に成丈け片付不申而は不相濟

木戸が京都にいる品川に宛てた書簡だが、「玉」(天皇)を薩長芸陣營が奪取することの重要性と共に、戦争に一時的に勝利しても長引けば世間の疑惑を生じさせ、外国の術中に陥ってしまうのでなるべく迅速に片づけなくてはならないという考えを示している。木戸・広沢にしてみれば、短期決戦で決着をつけるつもりであり、長期間の戦乱が予想される「討幕」を志向していたとは言えないと考えられる。よって、木戸・広沢を「討幕派」として考えてしまうことは、両者の思想を固定化してしまう恐れがあり、避けるべきである。

12月9日、遂に「王政復古の大号令」が発せられ、徳川家による大政奉還の勅許、「摂関幕府等」の廃絶、新政府の創設がなされる<sup>88</sup>。これにより、薩長両藩が新政体樹立のために將軍徳川慶喜・会津藩などを武力討伐することはなくなった。そのため、この時点で「討幕」も不可能になり、「討幕」をめぐる問題は解決されたと見るべきであろう<sup>89</sup>。しかし、次なる課題が新政府と徳川家の戦争につながる。それは、徳川慶喜を新政府に参画させるか否かという問題である。特に大久保一蔵は、徳川慶喜の新政府参画を阻むための戦争を希求している<sup>90</sup>。大政奉還以前の薩長両藩の新政権構想として、小松・西郷・大久保・木戸・広沢などが新政府に徳川家を加えるのか否かということをやっと決めていたのかという問題については、本稿では実証できない。例えば、大久保に至っては先述した通り、新政府に徳川家を加えない方針を貫こうとしたので、大政奉還以前からその考えを持っていたであろう。しかし、徳川慶喜が大政奉還を表明したことで、一気に流れは変化し、越前藩・土佐藩は新政府の成立後に、この慶喜の大政奉還の功績を以て新政府に加えようとした。

結局、新政府に徳川慶喜を加えることが決まったが、そうした情勢の京都に広沢が到着したのは、12月26日であった<sup>91</sup>。そして、江戸薩摩藩邸焼き討ちを契機に、徳川軍が京都に進軍したことで大久保が希求した徳川家を新政府から排除する戦争が慶応4年（1868）1月3日に始まる（鳥羽・伏見戦争）。その日は、広沢が井上聞多（馨）らと共に新政府の下参与に任じられた日である。明治政府における広沢真臣については別稿にて論じてみたい。

おわりに

## ①まとめ

それでは、本稿で設定した課題に解答していく。

### （1）広沢真臣の「攘夷」に対する認識と動向

外国人の言いなりにはならないということで、日本の面目を保つための攘夷実行（外国船砲撃）を支持し、広沢自身も興奮している様子がわかる感想を日記に記録している。また、幕府批判と諸外国への脅威感を背景に、長州藩に協力しなかった小倉藩を弾劾した。「尊攘ノ大義」を貫くため、長州藩にとってはその象徴的存在であった五卿の備前移転に反対し、長州藩自体の「面目」にも拘った。

しかし、4ヶ国連合艦隊による攻撃によって現時点での「攘夷」が不可能な状況となり、広沢自身も後始末（講和談判）を行なう一員となった。

### （2）広沢真臣の長州復権問題に対する認識と動向

内訌で乱れた長州藩内をまずは整えることで、中央政局における復権に向けて地固めを行なったと言える。また、「第一次薩長同盟」を背景として薩摩藩に依拠しながら幕長戦争を戦った。勝海舟との休戦交渉では、徳川慶喜を中心として公議により長州復権問題が解決されるであろうという言質を得ることに成功した。朝廷・幕府による長州征伐の危機がなくなったことで、四侯会議で長州藩の復権を目指した薩摩藩などの主張が通ることを希望していたが、結局は叶えられず、徳川慶喜に裏切られるかたちになったことは新しい政治体制の創出に向けた薩長両藩の原動力となった。

### （3）広沢真臣の薩長同盟・王政復古に対する認識と動向

薩摩藩の尽力と覚悟を知った広沢は、薩摩藩を信頼すると共に長州藩の将来性についても志向した。「第一次薩長同盟」については、藩内で指揮を執るに留まっていたが、新政体樹立（王政復古）に向けた「第二次薩長同盟」の成立には直接携わった。「第二次薩長同盟」で方針が確定したあとは、広沢自身も薩長芸三藩の出兵に向けて積極的に交渉・準備を行なった。長州復権・王政復古を目指す広沢らの敵は一貫して「一会桑」であった。広沢が長州藩に持ち帰った「徳川慶喜誅伐の御沙汰書」「松平容保・松平定敬誅伐の御沙汰書」は、出兵・挙兵の大義名分を創出すると共に、「第一次薩長同盟」から一貫して薩長両藩にとって「一会桑」の打倒が目標であったことがわかる。広沢は王政復古実現のために、挙兵論に望みをかけたと言える。

## ②今後の課題・展望

今後の課題について述べておく。本稿では、広沢真臣が政治的に重要な立場になっていく文久2年12月から慶応3年12月までの過程を中心にして論じてきたが、それ以前の嘉永期から文久2年11月までの動向・思想は追究できなかった。今回論じられなかった期間は国立国会図書館憲政資料室所蔵の広沢真臣日記群が大変貴重な手掛かりになると考えられる。また、今回論じてきた期間においても、触れることが叶わなかった諸点がある。例えば、芸州藩との交渉史や幕

長戦争期などについてである。これらについては、今後の課題としたい。

今後の研究の展望について若干私見を述べておきたい。広沢真臣と向き合う中で、長州藩の様々な重要人物が出てきた。例えば、広沢と共に長州藩を支えた山田宇右衛門や国貞直人、中村誠一などである。これらの人物にも注目することで、長州藩及び幕末政治史の新たな側面を開拓できる可能性がある。ぜひ研究の進展を望みたい。

また、宮内庁書陵部所蔵の木戸家文書に含まれている広沢真臣書状などの確認を徹底的に行なうことで、研究が進展する可能性がある<sup>92</sup>。今回は基礎的研究として刊本史料を中心に使用・整理して話を進めたが、未刊行史料にも注目しながら引き続き研究の深化を求めていく必要がある。

---

<sup>1</sup> 例えば、原口清・家近良樹・青山忠正・佐々木克・高橋秀直氏などの業績が挙げられる。次の通りである。

原口清『幕末中央政局の動向』（岩田書院、2007年）、『王政復古への道』（岩田書院、2007年）、家近良樹『幕末政治と倒幕運動』（吉川弘文館、1995年）、青山忠正『明治維新と国家形成』（吉川弘文館、2000年）、佐々木克『幕末政治と薩摩藩』（吉川弘文館、2004年）、高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』（吉川弘文館、2007年）。

<sup>2</sup> 近年の問題提起としては、歴史科学協議会『歴史評論』が2017年12月号にて「特集／明治維新史研究といま」という特集を組み、研究の現状を分析している。特に奈良勝司「明治維新論の現状と課題」（『歴史評論』812号、2017年）が挙げられる。

<sup>3</sup> 『広沢兵助真臣履歴』（山口県文書館所蔵）。

<sup>4</sup> 一坂太郎「『定本広沢真臣日記』について」（『廣澤真臣日記』マツノ書店、2001年）。

<sup>5</sup> 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。

<sup>6</sup> 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。履歴によると、文久2年11月28日に「定広公御軍装并上京一件用掛」、12月3日に「定広公御上京旅中用所役用向取斗」を命じられている。

<sup>7</sup> 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。

<sup>8</sup> 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。安政6年（1853）6月のペリー来航に際しては大森台場警衛のために江戸に滞在している。また、安政2年（1855）9月には藩主毛利敬親参勤のための警衛を命じられている。

<sup>9</sup> 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。例えば、蔵元順番検使の役職に就いていた。この役目は、米方や作事方などの諸局の出納を検閲することである。広沢は、安政6年（1859）3月から文久2年（1862）2月までこの職にあった。

<sup>10</sup> 末松謙澄『防長回天史』4（マツノ書店、2009年）56～57頁。

<sup>11</sup> 「日載」『広沢真臣日記』（マツノ書店、2001年）。

<sup>12</sup> 「日載」『広沢真臣日記』（前掲註11）。

- 
- 13 「日載」『広澤真臣日記』（前掲註11）。
- 14 「日載」『広澤真臣日記』（前掲註11）。
- 15 「日載」『広澤真臣日記』（前掲註11）。
- 16 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。
- 17 『防長回天史』4（前掲註10）289頁。
- 18 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）、『防長回天史』4（前掲註10）188～189頁。
- 19 下関市教育委員会編『白石家文書』（国書刊行会、1981年）96頁。
- 20 『白石家文書』（前掲註19）96頁、『防長回天史』4（前掲註10）188～189頁。
- 21 『防長回天史』4（前掲註10）371～373頁。
- 22 下関市立長府博物館『三吉周亮履歴并日記中摘要』（2018年）9頁。
- 23 奇兵隊と撰鋒隊が衝突した事件。事件を聞いた広沢は、白石正一郎に対して奇兵隊へ伝達するように依頼をしている。『白石家文書』（前掲註19）100～101頁。
- 24 『防長回天史』4（前掲註10）356頁。
- 25 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。
- 26 土方久元『回天実記 第1集』（東京通信社、1900年）59～61頁。
- 27 末松謙澄『防長回天史』5（マツノ書店、2009年）323～325頁。
- 28 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。
- 29 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。
- 30 『防長回天史』5（前掲註27）398～399頁。
- 31 『回天実記 第1集』（前掲註26）112～113頁。
- 32 『回天実記 第1集』（前掲註26）114頁。
- 33 『回天実記 第1集』（前掲註26）112～113頁。
- 34 『回天実記 第1集』（前掲註26）114頁。
- 35 『回天実記 第1集』（前掲註26）114～115頁。
- 36 『三吉周亮履歴并日記中摘要』（前掲註22）37頁。
- 37 『回天実記 第1集』（前掲註26）116頁。
- 38 『三吉周亮履歴并日記中摘要』（前掲註22）37頁。
- 39 末松謙澄『防長回天史』6（マツノ書店、2009年）154～155頁。
- 40 『防長回天史』6（前掲註39）163頁。
- 41 『防長回天史』6（前掲註39）165頁。
- 42 「大田戦争一件日記」『防長回天史』6（前掲註39）286頁。
- 43 『防長回天史』6（前掲註39）412頁。
- 44 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。
- 45 「柏村日記」『山口県史 史料編 幕末維新4』（2010年）43頁。
- 46 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。
- 47 「柏村日記」（前掲註45）44頁。
- 48 末松謙澄『防長回天史』7（マツノ書店、2009年）205～206頁。
- 49 妻木忠太『前原一誠伝』（マツノ書店、1985年）247頁。
- 50 『防長回天史』7（前掲註48）299～300頁。
- 51 『防長回天史』7（前掲註48）305～307頁。
- 52 高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』（前掲註1）では、薩摩藩主父子に対する長州藩主父子の書状発給を以て「薩長同盟」が成立したとする見解を提示するが、あくまでもこの段階では「和解」に過ぎないと言える。

<sup>53</sup> 佐々木克『幕末政治と薩摩藩』（前掲註1）が既に指摘するところである。

<sup>54</sup> 『防長回天史』7（前掲註48）452～455頁。

<sup>55</sup> この長州藩側にとっては不確定情報だった西郷吉之助による長州再征阻止のための大坂挙兵計画は、宮地正人氏が見出した「慶応元年12月26日中津川同志宛て池村久兵衛書簡」（宮地正人『幕末維新変革史（下）』岩波書店、2012年、11～12頁）に記された黒田了介（清隆）が証言した「さいごうよりの内意」の信憑性を補強するものと言える。それは、西郷が黒田らに語った話が、今度は黒田によって水戸浪士の越前守伊予之助・益子孝之助に伝わったものである。その西郷が秘めていた意思とは、「長と心を一つにして、さつ皇師に起り、会・一橋を踏つぶすべし、本国寺（※水戸藩兵の京都宿所）は定て橋に付べし、左候わば是も同様、それを機会として、防長ニヶ国より起り、其頃迄麦（※幕）滞在なれば、是も乗取手筈」というものである。ここから読み取れることは、西郷は長州再征を阻止するために薩摩藩が長州藩と協力して京都や大坂で挙兵し、一橋慶喜・会津藩などを打倒する必要性を感じていたものと思われる。さらに、長州藩自体の挙兵まで考えており、大坂城が拠点になっていた徳川政権を転覆させるという壮大な構想を有していたと見られる。ただし、これはあくまでも西郷による一方的な構想であり、長州藩とは詳しい意思の疎通はなく、したがって長州藩が防長両国から挙兵を考えていたわけではない。長州藩側が掴んだ西郷の大坂挙兵計画は、広沢が坂本龍馬との会談で得た情報だと考えられる。つまり、西郷は黒田だけでなく、坂本龍馬などへも挙兵計画を話していたのではないかと考えられる。薩摩藩側が如何に長州再征阻止に向けて動いているかということも坂本が広沢へ伝えたことで、長州藩側の決意がさらに強固となった。そういう意味では、広沢・坂本会談は、薩長両藩の和解がなされた後の次なる「同盟」へ向けた過程において意義のあるものであったと言える。

<sup>56</sup> 『防長回天史』7（前掲註48）456～457頁。

<sup>57</sup> 「柏村日記」（前掲註45）85頁。

<sup>58</sup> 復権問題をめぐる長州藩・芸州藩・幕府の交渉史については、今後の進展が望まれるテーマである。別稿にて集中的に検討を行なってみたい。

<sup>59</sup> 本研究で「第一次薩長同盟」として定義するのは、小松帯刀・西郷吉之助・木戸孝允・坂本龍馬の会談によって薩摩藩側が長州藩側に行なった約束のことであり、「慶応2年1月23日坂本龍馬宛て木戸孝允書簡」（日本史籍協会編『木戸孝允文書』二、東京大学出版会、2003年覆刻再刊、136～142頁）に幕長戦争が勃発した際の尽力すべき内容が記されている。6か条が記されてあるが、内容をまとめると次の4点になる。①幕長戦争となった際に2000の兵を出し、京都・大坂を固めること。②朝廷へ長州藩の復権を周旋すべきこと。③朝廷を擁して正義を阻んでいる「一会桑」（書簡中では「橋会桑」と決戦すべきこと。④長州藩の復権が成立した際には薩長両藩が協力して皇国のために尽力していくべきこと。先行研究は、青山忠正『明治維新と国家形成』（前掲註1）、佐々木克『幕末政治と薩摩藩』（前掲註1）、高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』（前掲註1）、家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局一体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変一』（ミネルヴァ書房、2011年）、三宅紹宣「薩長盟約の歴史的意義」（『日本歴史』647号、2002年）、「薩長盟約の成立と展開」（『日本歴史』761号、2011年）などがあり、「薩長同盟」の性格が

議論されてきた。しかし、これまでの「薩長同盟」に関する議論は、少なくとも幕長戦争休戦のころまでしか論じられてこなかった。本研究ではもう少し長い期間を視野に入れ、慶応3年8月14日の京都・小松帯刀邸（近衛家別邸・御花畑屋敷）にて行われた薩長会談と9月18日の山口にて行われた薩長会談で「第二次薩長同盟」が成立したと見る（後述）。そのため、朝廷・幕府による長州再征を推進する一会桑を打倒対象にした慶応2年1月の薩長会談をその前段階としての「第一次薩長同盟」の成立と考える。

- 60 末松謙澄『防長回天史』8（マツノ書店、2009年）115～116頁。
- 61 立教大学日本史研究会編『大久保利通関係文書』5（1971年、吉川弘文館）155～156頁。宛所は記されていないが大久保一蔵（利通）宛てだと思われる。
- 62 南奇兵隊（第二奇兵隊）が倉敷代官所・浅尾藩陣屋を襲撃した事件。南奇兵隊は幕府軍により敗走し、逃げ帰った者たちは長州藩により罰せられた。
- 63 末松謙澄『防長回天史』8（マツノ書店、2009年）243～245頁。
- 64 「中島日記」『防長回天史』8（前掲註63）565～572頁。
- 65 一坂太郎編・田村哲夫校訂『高杉晋作史料』第1巻（マツノ書店、2002年）393～394頁。
- 66 維新史料編纂事務局編『維新史』第4巻（維新史料編纂事務局、1941年）では、「討幕運動の展開」などが立項されている。
- 67 井上勲『王政復古』（中央公論新社、1991年）259～264頁。幕末期における広沢真臣に関する研究は全くないので、広沢を「討幕派」として考えてもよいのかという検討はなされたことがない。広沢に比べて多くの研究蓄積がある西郷隆盛についての最新研究・評伝は、家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局一体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変一』（前掲註58）、『西郷隆盛』（ミネルヴァ書房、2017年）がある。家近氏の研究では、西郷は「武力倒幕」を目指していたとしており、「討幕派」として考えられていることがわかる。
- 68 「討幕」とは、徳川政権（幕府）との直接戦争により政権転覆を果たす思想だと本稿では定義する。また、「徳川政権」とは、本稿では江戸・大坂に分裂していた「幕府」の総称とする。「一会桑勢力」とは別個であり、一橋慶喜は徳川家・将軍職を相続したことで、徳川政権（幕府）の頂点に位置した。西郷・大久保・木戸・広沢らは、徳川政権との直接戦争ではなく、打倒対象を将軍徳川慶喜・会津藩・桑名藩（一会桑）とかなり限定的に絞り込んで政治変革を行なっていくことを志向していたと考えられる。つまり、政局を動かしていた最大の権力者である将軍慶喜を中心とする一派を封じ込めることができれば、徳川政権もそれに伴い瓦解・消滅させていくことができるという計算ではなかったかと考えられる。
- 69 「柏村日記」（前掲註45）212～220頁。薩摩藩の挙兵計画としては、①京都薩摩藩邸には1000人がおり（「藩邸居合之兵員千人有之候間」）、兵力の3分の1は御所を守る（「三分之一を以御所之御守衛ニ繰込」）。さらに、兵力の3分の1で会津藩邸を急襲し（「今一分を以会津邸急襲仕」）、残る兵力の3分の1で幕兵屯所を焼き払う（「残ル一分を以堀川辺幕兵屯所を焼払候」）。②国元から3000人が京坂地方へ登ってくるので（「国元え申遣し兵員三千人差登し」）、この兵力で大坂城（「浪華城」）を突破し、幕府方の軍艦を破る。③江戸付近にも1000人ぐらいは兵員がおり（「江戸表ニ定府其外取合千人位罷居」）、他にも水戸浪士（「水藩浪士」）などの同志が所々に潜伏しているので、甲府城に立て籠もり、兵隊を京都に繰り出して支えてくれるようにする、というものである。実際の戦闘において、幕兵屯所を焼き払い、大坂城を突破し、幕府の軍艦を大破させるという戦略は幕府の拠点を押さえる意味合いを持つ。薩摩藩・西郷としての戦略は、幕府を相手とした「討幕」戦争にはしないという名目だが、京坂方面の幕府の拠点は押さえておかなければ、薩摩藩側が不利になるのは当然である。さらに、同志が甲府城に籠城する作戦は、江戸から京坂方面への幕

府軍の進軍を遮断し、薩摩藩に対する援軍も期待するものである。また、甲府・江戸方面でも挙兵するとしているが、関東を平定しようという計画ではないことにも注目する必要がある。「討幕」を目指しているならば、京都・大坂だけでなく、江戸の平定も考える必要があるのではないだろうか。つまり、薩摩藩・西郷らが重視しているのは、京坂方面での挙兵（徳川慶喜と支持勢力の打倒及びクーデター）による天皇を奪取したうえでの新政体樹立ではなかったかと考えられる。

- 70 三宅紹宣「近世近代防長両国における日記の基礎的研究」(科学研究費助成事業研究成果報告書、課題番号：26370791)及び「明治150年記念 後世に伝えたい山口県ゆかりの人物等研究支援事業成果発表会・中間報告会」(2018年12月23日、山口県立山口図書館)における本研究の中間報告に対する三宅紹宣氏の講評では、薩摩藩が討幕を行なわない(「於弊藩討幕ハ不仕」と語っているのは、薩摩藩単独では討幕を行なわないという意味であるとし、この文言を根拠にして薩摩藩の討幕を否定する見解は「柏村日記」の誤読であるとする。薩摩藩は土佐藩の出兵を待っており、土佐藩がやってくなければ薩摩藩だけでも挙兵すると書いてあることから、薩摩藩には討幕の意思はあったと見ている。しかし、本研究においては、薩摩藩や長州藩は「討幕」を実行することは不可能であったとし、この「柏村日記」記載の薩摩藩側(西郷)の説明は整合性があると考えている。特に挙兵論の主導者である西郷は「名分条理を正す」ということに徹底的に拘った人物であった。仮に西郷が「討幕」のために挙兵するとしたら、大義名分として万人が納得する論理を用意する必要がある。しかし、「幕府」は天皇・朝廷から形式上は「大政委任」されている政権なのである。いくら幕府批判を展開しても、「討幕」のための挙兵を実行してしまうと、天皇を否定することにつながる。また、「討幕」は薩摩藩内でも支持は得られない。西郷はその辺りの論事情を考慮して「於弊藩討幕ハ不仕」とし、将軍慶喜を「賊臣」として討伐するために「討将軍之論旨」の発給を計画したのではないだろうか。つまり、徳川政権(幕府)を崩壊させ、新政体樹立を行なうために「討幕」ではなく、「討将軍」あるいは会津藩の打倒を大義名分にしたと言える。また、中間報告会にて三宅紹宣氏から、長州藩が「討幕」の意思を持っている根拠として、①軍備を整えていること、②「慶応3年8月14日三吉慎蔵宛て坂本龍馬書簡」(平尾道雄監修『坂本龍馬全集』光風社書店、1978年、269頁)にて坂本が幕府との海軍決戦を構想していること、③慶応3年12月22日の長州藩における御前会議にて、幕府が辞官納地の勅命を受け入れないときは「討幕之令」を命じてほしい旨を話し合っていること、以上3点を示していただいた。①について、軍備を整えることは藩としてあらゆる非常事態に備えることなので「討幕」の意思の有無に拘わらず行われるものである。②について、坂本は「薩此頃(大島吉之助等)決心、幕と一戦相心得候得ども、土佐後藤庄次郎が今一度上京をまち居申候」「思ふニ一朝、幕と戦争致し候時ハ、御本藩御藩薩州土佐の軍艦をあつめ一組と致し、海上の戦仕候はずバ、幕府とハとても対戦ハ出来申すまじく」と確かに記している。しかし、坂本の言葉で薩長両藩の政略方針・言説を理解してよいのであろうか。これは当事者と他者の捉え方の違いではないかと言える。確かに坂本は西郷吉之助など薩摩藩が「討幕」を決心していると捉えているが、挙兵方針を立案した当事者ではなく、あくまでも他者である坂本の捉え方を以て薩長両藩の内情を理解することは史料批判の上でも避けるべきではないだろうか。③について、この御前会議で話し合われたことは「柏村日記」(『山口県史 史料編 幕末維新4』252頁)に記されている。その一つに、「将軍職御免尚級を下り諸侯列ニ加入、支配地之内相当返上被仰付候段勅命有之候上、不奉時ハ討幕之令速ニ被仰出度」とある。確かに長州藩内で「討幕之令」について話し合われたことがわかる。つまり、矛盾しているようだが、新政府の樹立が宣言され、「撰関幕府等」の廃止がなされて、初めて「討幕」論が長州藩内で公式に話し合われたと見るべきである。これは、徳川家が辞官納地の勅命を受け入れず、未だに「幕府」としての立場に固執する場合の措置として「討幕」が考えられているのである。この点は三宅氏の批判を受け入れ

たい。本研究の主張と三宅氏の批判点から導いた結論としては、新政体樹立が果たされた前後によって長州藩にとっての「討幕」の意味合いは変化しているということであろう。慶応3年6月～12月9日までは、薩長両藩は挙兵（徳川慶喜と支持勢力の打倒及びクーデター）によって新政府の樹立を目指し、大政奉還を受けて徳川慶喜打倒策は見送られた。その結果、クーデターによって「王政復古の大号令」が宣言されて、新政府樹立や「摂関幕府等」の廃止が行われた。そして、12月22日の長州藩内では京都からの情報を得たうえで、徳川家が辞官納地の勅命に従わず、あくまでも「幕府」としての立場を貫こうとするならば、「討幕」を行なうことも検討したのである。つまり、慶応3年6月～12月9日までの薩長両藩は「討幕」を実行することは考えておらず、新政体樹立が行われた後に長州藩内で「討幕」が議論されたと言える。これは、薩摩藩自体が「討幕」を厳禁としていたことと対比すると、長州藩は藩主父子を交えて「討幕」を議論していたのは注目に値する。

- 71 『大久保利通日記』上巻（日本史籍協会、1927年）391～396頁。
- 72 本文でも記した通り、慶応3年8月14日の京都における薩長会談にて薩摩藩側から具体的な挙兵計画が伝えられ、9月18日に山口にて薩長出兵が合意されたことを以て「第二次薩長同盟」の成立とする。「第二次薩長同盟」の意味は、引き続き将軍徳川慶喜・会津藩を打倒対象とし、出兵・挙兵によって新政体樹立（王政復古）を実現することである。
- 73 「柏村日記」（前掲註45）235頁。
- 74 「指華入京日載」（早川純三郎『史籍雑纂』第5、国書刊行会、1912年）468頁。宛所は記されていないが、少なくとも長州藩宛てだと思われる。
- 75 『大久保利通日記』上巻（前掲註71）397頁。
- 76 『大久保利通日記』上巻（前掲註71）398頁。
- 77 『大久保利通日記』上巻（前掲註71）398頁。
- 78 『大久保利通日記』上巻（前掲註71）399頁。
- 79 『大久保利通日記』上巻（前掲註71）399頁。
- 80 末松謙澄『防長回天史』9（マツノ書店、2009年）463～464頁。
- 81 『大久保利通日記』上巻（前掲註71）399～401頁。
- 82 『防長回天史』9（前掲註80）466～469頁に、中山忠能・正親町三条実愛・中御門経之から長州藩主父子に発給された「官位復旧の宣旨」「徳川慶喜誅伐の御沙汰書」「松平容保・松平定敬誅伐の御沙汰書」と広沢らの請書の全文が掲載されている。
- 83 従来では「討幕の密勅」と呼称されてきたが、「徳川慶喜誅伐の御沙汰書」とする方がより正確にこの史料の意味を伝えることができると考えられる。それでは、なぜ「討幕の密勅」という呼称ではいけないのか、その理由を提示しておきたい。まずは、8月14日の薩長会談にて薩摩藩側が説明した計画では、「討將軍之綸旨」を手に入れるというものであった。つまり、密勅降下の主導者である小松・西郷・大久保は「討幕の密勅」を手に入れようとしていたわけではないということである。さらに、もう一点は内容である。「討幕の密勅」であるならば、「幕府誅伐」「関東誅伐」などが明記されて然るべきではないか。それが将軍慶喜の打倒ということはかなり限定的に絞り込まれている。この2つの点が、「徳川慶喜誅伐の御沙汰書」という呼称を推奨する理由である。
- 84 『大久保利通日記』上巻（前掲註71）405頁。
- 85 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。
- 86 土方久元『回天実記』第2集（東京通信社、1900年）247～248頁。
- 87 『木戸孝允文書』二（前掲註59）336～340頁。
- 88 「王政復古の沙汰書」遠山茂樹校注『日本近代思想大系2 天皇と華族』（岩波書店、1988年）3～5頁。
- 89 慶応3年6月～12月9日までの木戸孝允・広沢真臣が武力衝突を覚悟していたことは確

---

かであるが、「討幕」を志向していたかどうかという問題は今後の更なる議論を待ちたい。なぜならば、木戸や広沢がはっきりと「討幕」方針を打ち出したという根拠（史料）が見受けられないからである。木戸・広沢をはじめとした長州藩の目標は復権と新政体樹立であり、そのための武力衝突はやむを得ないとしても、「討幕」に主眼を置いていたとは言えないのではないかと考えられる。また、薩摩藩の西郷隆盛が「討幕」を考えていたとは言えないのではないかと指摘したのは管見の限りでは、佐々木克『幕末史』（筑摩書房、2014年）だけである。

<sup>90</sup> 「慶応4年1月2日西郷吉之助宛て大久保一蔵書簡」『大久保利通文書』二（日本史籍協会、1927年）147～148頁。この書簡では、「慶喜上京相成候而者、実以難取返次第ニ立至候ハ必定候付、是非会桑帰国取計、上京与申今日之御達振ならてハ難相济奉存候、若其儀上京相成候得ハ戦ハ窮而出来不申、今日ニ相成候而ハ戦ニ不及候得ハ皇国之事ハ夫限水泡ト相成可申」と記されており、徳川慶喜上京を阻止するために戦争になることを大久保は望んでいたのである。

<sup>91</sup> 『広沢兵助真臣履歴』（前掲註3）。

<sup>92</sup> 宮内庁書陵部所蔵木戸家文書は「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」で閲覧可能。  
<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/>

**【付記】**本研究にあたり、指導教官として後見人を引き受けて頂いた西村慎太郎氏（人間文化研究機構国文学研究資料館・総合研究大学院大学准教授、NPO法人歴史資料継承機構じゃんぴん代表理事）から様々なアドバイスを頂いた。特に「明治150年記念 後世に伝えたい山口県ゆかりの人物等研究支援事業成果発表会・中間報告会」（2018年12月23日、山口県立山口図書館）に向けた準備に際しては多くの意見を頂戴し、筆者自身の見解が深まった。御多忙の中、指導していただいたことに記して御礼申し上げる。また、中間報告会にあたって講評していただいた三宅紹宣氏・稲益あゆみ氏、事務連絡など多くの手続きをしていただいた大野仁史氏を始めとする山口県政策企画課、中間報告会にて聴講していただいた全ての方々に御礼申し上げます。なお、本研究は山口県による「平成30年度 明治150年記念後世に伝えたい山口県ゆかりの人物等研究支援事業」における助成を受けたものである。